

一〇一 旅人豊間根（とよまね）村を過ぎ、  
夜更（ふ）け疲れたれば、知音（ちいん）  
の者の家に灯火の見ゆるを幸（さいわい）  
に、入りて休息せんとせしに、よき時に来  
合（きあわ）せたり、今夕死人あり、留守  
（るす）の者なくていかにせんかと思ひし  
ところなり、しばらくの間頼むといいて主  
人は人を喚（よ）びに行きたり。迷惑千万  
（めいわくせんばん）なる話なれど是非も  
なく、囲炉裡（いろり）の側にて煙草（タバコ）  
を吸いてありしに、死人は老女にて  
奥の方に寝させたるが、ふと見れば床（と  
こ）の上にむくむくと起き直る。胆潰（き  
もつぶ）れたれど心を鎮（しず）め静かに  
あたりを見廻（みまわ）すに、流し元（も  
と）の水口の穴より狐のごとき物あり、面  
（つら）をさし入れて頻（しきり）に死人  
の方を見つめていたり。さてこそと身を潜  
（ひそ）め窺（ひそ）かに家の外に出で、

背戸（せと）の方に廻りて見れば、正しく狐にて首を流し元の穴に入れ後足（あとあし）を爪立（つまた）てていたり。有合（ありあ）わせたる棒をもてこれを打ち殺したり。

○下閉伊郡豊間根村大字豊間根。

一〇二 正月十五日の晩を小正月（こしよ）うがつ）という。宵（よい）のほどは子供ら福の神と称して四五人群を作り、袋を持ちて人の家に行き、明（あけ）の方から福の神が舞い込んだと唱（とな）えて餅を貰（もら）う習慣あり。宵を過ぐればこの晩に限り人々決して戸の外に出づることなし。小正月の夜半過ぎは山の神出でて遊ぶと言（い）い伝えてあればなり。山口の字丸古立（まるこだち）におまさという今三十五六の女、まだ十二三の年のことなり。いか

なるわけにてか唯一人にて福の神に出で、  
ところどころをあるきて遅くなり、淋（さ  
び）しき路を帰りしに、向うの方より丈  
（たけ）の高級男来てすれちがいたり。顔  
はすてきに赤く眼はかがやけり。袋を捨て  
て遁げ帰り大いに煩いたりといえり。

一〇三 小正月の夜、または小正月ならず  
とも冬の満月の夜は、雪女が出でて遊ぶと  
もいう。童子をあまた引き連れてくるとい  
えり。里の子ども冬は近辺の丘に行き、櫓  
遊（そりっこあそび）をして面白さのあま  
り夜になることあり。十五日の夜に限り、  
雪女が出るから早く帰れと戒めらるるは常  
のことなり。されど雪女を見たりという者  
は少なし。

一〇四 小正月の晩には行事甚（はなは）  
だ多し。月見（つきみ）というは六つの胡

桃（くるみ）の実（み）を十二に割り一時（いつとき）に炉（ろ）の火にくべて一時にこれを引き上げ、一列にして右より正月二月と数うるに、満月の夜晴なるべき月にはいつまでも赤く、曇るべき月には直（すぐ）に黒くなり、風ある月にはフーフーと音をたてて火が振（ふる）うなり。何遍繰り返しても同じことなり。村中いずれの家にも同じ結果を得るは妙なり。翌日はこの事を語り合い、例えば八月の十五夜風とあらば、その歳（とし）の稲の蒔入（かりいれ）を急ぐなり。

○五穀の占、月の占多少のヴァリエテをもつて諸国に行なわる。陰陽道（おんようどう）に出でしものならん。

一〇五　また世中見（よなかみ）というのは、同じく小正月の晩に、いろいろの米にて餅

をこしらえて鏡となし、同種の米を膳（ぜん）の上に平（たい）らに敷き、鏡餅（かがみもち）をその上に伏せ、鍋（なべ）を被（かぶ）せ置きて翌朝これを見るなり。餅につきたる米粒（こめつぶ）の多きものその年は豊作なりとして、早中晩の種類を択び定むるなり。

一〇六 海岸の山田にては蜃気楼（しんきろう）年々見ゆ。常に外国の景色なりという。見馴（みな）れぬ都のさまにして、路上の車馬しげく人の往来眼ざましきばかりなり。年ごとに家の形などいささかも違うことなしといえり。

一〇七 上郷村に河ぶちのうちという家あり。早瀬川の岸にあり。この家の若き娘、ある日河原に出でて石を拾いてありしに、見馴れぬ男来たり、木の葉とか何とかを娘

にくれたり。丈（たけ）高く面朱（しゆ）のようなる人なり。娘はこの日より占（うらない）の術を得たり。異人は山の神にて、山の神の子になりたるなりといえり。

一〇八 山の神の乗り移りたりとて占をなす人は所々にあり。附馬牛（つくもうし）村にもあり。本業は木挽（こびき）なり。柏崎の孫太郎もこれなり。以前は発狂して喪心したりしに、ある日山に入りて山の神よりその術を得たりしのちは、不思議に人の心中を読むこと驚くばかりなり。その占いの法は世間の者とは全く異なり。何の書物をも見ず、頼みにきたる人と世間話をなし、その中にふと立ちて常居（じょうい）の中（なか）をあちこちとあるき出すと思ふほどに、その人の顔は少しも見ずして心に浮びたることをいうなり。当らずということなし。例えばお前のウチの板敷（いた

じき)を取り離し、土を掘りて見よ。古き鏡または刀の折れあるべし。それを取り出さねば近き中に死人ありとか家が焼くるとかいうなり。帰りて掘りて見るに必ずあり。かかる例は指を屈するに勝(た)えず。

一〇九 盆のころには雨風祭とて藁(わら)にて人よりも大なる人形(にんぎょう)を作り、道の岐(ちまた)に送り行きて立つ。紙にて顔を描(えが)き瓜(うり)にて陰陽の形を作り添えなどす。虫祭の藁人形にはかかることはなくその形も小さし。雨風祭の折は一部落の中にて頭屋(とうや)を択(えら)び定め、里人(さとびと)とびと集まりて酒を飲みてのち、一同笛太鼓(ふえたいこ)にてこれを道の辻まで送り行くなり。笛の中には桐(きり)の木にて作りたるホラなどあり。これを高く吹く。さてその折の歌は 二百十日の雨風ま

つるよ、どちらの方さ祭る、北の方さ祭る」という。

○ 『東国輿地（よち）勝覧』によれば韓国にても壇（れいだん）を必ず城の北方に作ること見ゆ。ともに玄武神の信仰より来たれるなるべし。

一一〇 ゴンゲサマというは、神楽舞（かぐらまい）の組ごとに一つずつ備われる木彫（きぼり）の像にして、獅子頭（ししがしら）とよく似て少しく異（こと）なれり。甚だ御利生（ごりしょう）のあるものなり。新張（にいぼり）の八幡社の神楽組のゴンゲサマと、土淵村字五日市（いつつかいち）の神楽組のゴンゲサマと、かつて途中にて争いをなせしことあり。新張のゴンゲサマ負けて片耳（かたみみ）を失いたりとて今もなし。毎年村々を舞いてある故、これ



を見知らぬ者なし。ゴンゲサマの靈驗（れいげん）はことに火伏（ひぶせ）にあり。右の八幡の神楽組かつて附馬牛村に行きて日暮（ひぐ）れ宿を取り兼ねしに、ある貧しき者の家にて快（こころよ）くこれを泊（と）めて、五升榊（ます）を伏せてその上にゴンゲサマを座（す）え置き、人々は臥（ふ）したりしに、夜中にながつがつと物を噛（か）む音のするに驚きて起きてみれば、軒端（のきばた）に火の燃えつきてありしを、榊の上なるゴンゲサマ飛び上り飛び上りして火を喰（く）い消してありしなりと。子どもの頭を病む者など、よくゴンゲサマを頼み、その病を噛みてもらうことあり。

一一一 山口、飯豊、附馬牛の字荒川東禅寺および火渡（ひわたり）、青笹の字中沢ならびに土淵村の字土淵に、ともにダンノ

ハナという地名あり。その近傍にこれと相對して必ず蓮台野（れんだいの）という地あり。昔は六十を超えたる老人はすべてこの蓮台野へ追ひ遣るの習（ならい）ありき。老人はいたずらに死んで了（しま）うこともならぬ故に、日中は里へ下り農作して口を糊（ぬら）したり。そのためにも山口土淵辺にては朝（あした）に野らに出づるをハカダチといい、夕方野らより帰ることをハカアガリというといえり。

○ダンノハナは壇の塙なるべし。すなわち丘の上にて塚を築きたる場所ならん。境の神を祭るための塚なりと信ず。蓮台野もこの類なるべきこと 『石神問答』 中にいえり。

一一二　ダンノハナは昔館（たて）のありし時代に囚人を斬（き）りし場所なるべしという。地形は山口のも土淵飯豊のもほぼ

同様にて、村境の岡の上なり。仙台にもこの地名あり。山口のダンノハナは大洞（おほら）へ越ゆる丘の上にて館址（たてあと）よりの続きなり。蓮台野はこれと山口の民居を隔てて相對す。蓮台野の四方はすべて沢なり。東はすなわちダンノハナとの間の低地、南の方を星谷という。此所には蝦夷屋敷（えぞやしき）という四角に凹（へこ）みたるところ多くあり。その跡（あと）きわめて明白なり。あまた石器を出す。石器土器の出るところ山口に二ヶ所あり。他の一は小字（こあぎ）をホウリヨウという。この土器と蓮台野の土器とは様式全然殊（こと）なり。後者のは技巧いささかもなく、ホウリヨウのは模様（もよう）なども巧（たくみ）なり。埴輪（はにわ）もここより出づ。また石斧石刀の類も出づ。蓮台野には蝦夷錢（えぞせん）とて土にて錢の形をしたる径二寸ほどの物多く

出づ。これには単純なる渦紋（うずもん）などの模様あり。字ホウリヨウには丸玉・管玉（くだたま）も出づ。この石器は精巧にて石の質も一致したるに、蓮台野のは原料いろいろなり。ホウリヨウの方は何の跡ということもなく、狭き一町歩（いっちようぶ）ほどの場所なり。星谷は底の方（かた）今は田となれり。蝦夷屋敷はこの両側に連なりてありしなりという。このあたりには掘れば崇（たたり）ありという場所二ヶ所ほどあり。

○外（ほか）の村々にても二所の地形および関係これに似たりという。

○星谷という地名も諸国にあり星を祭りしところなり。

○ホウリヨウ権現は遠野をはじめ奥羽一円

に祀らるる神なり。蛇の神なりという。名義を知らず。

一一三 和野にジヨウツカ森というところあり。象を埋めし場所なりといえり。此所だけには地震なしとて、近辺にては地震の折はジヨウツカ森へ遁げよと昔より言い伝えたり。これは確かに人を埋めたる墓なり。塚のめぐりには堀あり。塚の上には石あり。これを掘れば祟（たたり）ありという。

○ジヨウズカは定塚、庄塚または塩塚などとかきて諸国にあまたあり。これも境の神を祀りしところにて地獄のシヨウツカの奪衣婆（だつえぼ）の話など関係あること『石神問答』に詳（つまびらか）にせり。また象坪などの象頭神とも関係あれば象の伝説は由（よし）なきにあらず、塚を森とすることも東国の風なり。

一一四 山口のダンノハナは今は共同墓地なり。岡の頂上にうつ木を栽（う）えめぐらしその口は東方に向かいて門口（もんぐち）めきたるところあり。その中ほどに大なる青石あり。かつて一たびその下を掘りたる者ありしが、何ものをも発見せず。のち再びこれを試みし者は大なる瓶（かめ）あるを見たり。村の老人たち大いに叱（しか）りければ、またもとのままになし置きたり。館（たて）の主の墓なるべしという。此所に近き館の名はボンシャサの館という。いくつかの山を掘り割りて水を引き、三重四重に堀を取り廻（めぐ）らせり。寺屋敷・砥石森（といしもり）などいう地名あり。井の跡として石垣（いしがき）残れり。山口孫左衛門の祖先ここに住めりという。『遠野古事記（とおのこじき）』に詳（つまびら）かなり。

一一五 御伽話（おとぎばなし）のことを昔々（むかしむかし）という。ヤマハハの話最も多くあり。ヤマハハは山姥（やまうば）のことなるべし。その一つ二つを次に記すべし。

一一六 昔々あるところにトトとガガとあり。娘を一人持てり。娘を置いて町へ行くとして、誰がきても戸を明けるなど戒しめ、鍵（かぎ）を掛けて出でたり。娘は恐ろしければ一人炉にあたりすくみていたりしに、真昼間（まひるま）に戸を叩きてここを開けと呼ぶ者あり。開かずば蹴破（けやぶ）るぞと嚇（おど）す故（ゆえ）に、是非なく戸を明けたれば入りきたるはヤマハハなり。炉の横座（よこざ）に蹈（ふ）みはたかりて火にあたり、飯をたきて食わせよという。その言葉に従い膳（ぜん）を支度してヤマハハに食わせ、その間に家を遁げ出

したるに、ヤマハハは飯を食い終りて娘を  
追い来たり、おいおいにその間（あいだ）  
近く今にも背（せな）に手の触（ふ）るる  
ばかりになりし時、山の蔭（かげ）にて柴  
（しば）を苴る翁に逢う。おれはヤマハハ  
にぼっかけられてあるなり、隠（かく）し  
てくれよと頼み、苴り置きたる柴の中に隠  
れたり。ヤマハハ尋ね来たりて、どこに隠  
れたかと柴の束（たば）をのけんとして柴  
を抱（かか）えたるまま山より滑（すべ）  
り落ちたり。その隙（ひま）にここを遁  
（のが）れてまた萱（かや）を苴る翁に逢  
う。おれはヤマハハにぼっかけられてある  
なり、隠してくれよと頼み、苴り置きたる  
萱の中に隠れたり。ヤマハハはまた尋ね来  
たりて、どこに隠れたかと萱の束をのけん  
として、萱を抱えたるまま山より滑り落ち  
たり。その隙にまたここを遁れ出でて大き  
なる沼の岸に出でたり。これよりは行くべ



き方（かた）もなければ、沼の岸の大木の梢に昇（のぼ）りいたり。ヤマハハはどけえ行つたとて遁（の）がすものかとして、沼の水に娘の影の映（うつ）れるを見てすぐに沼の中に飛び入りたり。この間に再び此所を走り出で、一つの笹小屋（ささごや）のあるを見つけ、中に入りて見れば若き女いたり。此にも同じことを告げて石の唐櫃（からうど）のありし中へ隠してもらいたるところへ、ヤマハハまた飛び来たり娘のありかを問えども隠して知らずと答えたれば、いんね来ぬはずはない、人くさい香がするものという。それは今雀（すずめ）を炙（あぶ）って食つた故（ゆえ）なるべしと言え、ヤマハハも納得（なっとく）してそんなら少し寝（ね）ん、石のからうどの中にしようか、木のからうどの中がよいか、石はつめたし木のからうどの中にといいて、木の唐櫃の中に入りて寝たり。家の

女はこれに鍵（かぎ）を下（おろ）し、娘を石のからうどより連れ出し、おれもヤマハハに連れて来られたる者なればともどもにこれを殺して里へ帰らんとて、錐（きり）を紅（あか）く焼きて木の唐櫃の中に差し通したるに、ヤマハハはかくとも知らず、ただ二十日鼠（はつかねずみ）がきたと言えり。それより湯を煮立（にた）てて焼錐（やききり）の穴より注（そそ）ぎ込みて、ついにそのヤマハハを殺し二人ともに親々の家に帰りたり。昔々の話の終りはいづれもコレデンドハレという語をもつて結ぶなり。

一一七 昔々これもあるところにトトとガガと、娘の嫁に行く支度を買いに町へ出て行くとして戸を鎖（とぎ）し、誰がきても明けるなよ、はアと答えたれば出でたり。昼のころヤマハハ来たりて娘を取りて食い、

娘の皮を被（かぶ）り娘になりておる。夕方二人の親歸りて、おりこひめこ居たかど門の口より呼べば、あ、いたます、早かつたなしと答え、二親（ふたおや）は買いたりしいろいろの支度の物を見せて娘の悦（よろこ）ぶ顔を見たり。次の日夜（よ）の明けたる時、家の鶏羽（は）ばたきして、糠屋（ぬかや）の隅（すみ）ツ子（こ）見ろじや、けけろと啼（な）く。はて常（つね）に變りたる鶏の啼きようかなと二親（ふたおや）は思いたり。それより花嫁を送り出すとてヤマハハのおりこひめこを馬に載せ、今や引き出さんとするときまた鶏啼く。その声は、おりこひめこを載せなえでヤマハハのせた、けけろと聞（きこ）ゆ。これを繰り返して歌いしかば、二親も始めて心づき、ヤマハハを馬より引き下（おろ）して殺したり。それより糠屋の隅を見に行きしに娘の骨あまた有（あ）りたり。

○糠屋は物おきなり。

一一八 紅皿欠皿（べにざらかけざら）の話も遠野郷に行（おこ）なわる。ただ欠皿の方はその名をヌカボという。ヌカボは空穂（うつぼ）のことなり。継母（ままはは）に悪（にく）まれたれど神の恵（めぐみ）ありて、ついに長者の妻となるという話なり。エピソードにはいろいろの美しき絵様（えよう）あり。折（おり）あらば詳しく書き記すべし。

一一九 遠野郷の獅子踊（ししおどり）に古くより用いたる歌の曲あり。村により人によりて少しずつの相異あれど、自分の聞きたるは次のごとし。百年あまり以前の筆写なり。

○獅子踊はさまでこの地方に古きものにあ

らず。中代これを輸入せしものなることを  
人よく知れり。